



パー・アンバー(9)



アダルト小説

多谷昇太

まさか同ビル4Fにある邵廻瑩(ショウウ・ダイエイ)が勤めるXX新聞の東京支局に直接乗り込む分けにも行かなかったし、だから俺は算段をめぐらして昼食時間帯を狙ったのだ。時刻は正午少し前、邵廻瑩がどこで昼食を取るか、だった。あらかじめネット調べたら10Fには高級フレンチレストランがあり、B1階には炭焼き居酒屋があるのみだ。まずこの2店には行くまい。すれば表に昼食を取りに行くだろう。それを待つてどうかコンタクトをしようという腹づもりだった。ビル内には自由に立ち入れるし、さて中に入つて降りてくるエレベーター前で待とうか、などと考えるながらビル手前の歩道上で顎に手をやりながら立ち止まっていると案の定ビル内から三々五々人が出て来た。服装は違うだろうがミキこと、邵廻瑩を見分けることには自信があつた。何せ数時間とは云え、いと近きお近づきをさせてもらった身だ。よもや見間違えることとはないだろう：などと注視していたがそれどころか見分けるまでもなく唯の一発で彼女を確認し得た。彼女は黒地に目にも鮮やかな花柄をあしらつた、何とチ

ヤイナドレス姿で出て来たのだ。真昼間から、しかも往來に、なぜそんな姿で出て来たのか皆目見当もつかないが、しかしその姿の目を引くことと云つたらない。好色な目で男が、好奇な目で女が彼女をジロジロと眺めて行く。彼女の横には背広姿の40年配の男が付きそつていて2人は他の人たちと違つて歩道をまっすぐ横切り、車道に止めてある先ほど目に入ったセンチユリイに向かつて行くようだ。このままドアが開いて2人を乗せてしまつては彼女にコンタクトなどしようもない。ここまでわざわざ来ていながら残念だが：などとあきらめかけた時ビルの出口付近から「おい、相田！」と男の名を誰かが呼んだ。男は邵廻瑩に断つてからそちらへと向かう。邵廻瑩は車から出て来て後部ドアを開けた運転手を車へと戻す。このまま車の横に立つて男を待つようだ。しめた。これは今しかない。俺は何気ない風を装つて邵廻瑩に近づき「おや？君は：ミキじゃない？いや、これはこれは。偶然だね。俺だよ、俺。田村だよ。覚えてるだろ？ミキ」と声をかける。しかし「え？ミキ？：田村つて：誰ですか？あなた」と邵廻瑩はまったくの他人顔だ。皆目俺を見分けない。しかし数秒間俺を凝視するうちに『この得体の知れないナンパ男め。気安く私に声をかけるんじゃないよ』だつた初めの表情がどこか探るようなそれに

変わってくる。俺の顔に何か見覚えを感じたのだろう。ここぞとばかり俺は言葉をつなぐ「ああ、失礼。人違いをしたようです。あんまり知人に似ていたものだから。ははは。サマンサ・クリニックで知り合ったミキと勘違いして……え？サマンサ・クリニック？！」邵廻瑩がいささかでも声を高めた。「ど、どうしてそんなことを……あなたは、あなたはいったい誰ですか？！」と逆に質問をしてくる邵廻瑩のその声にはバー・アンバーで聞いた中国訛りがまったくない。実に綺麗な日本語のイントネーションである。もともとミキの感情が安定した時には（ミキに云わせれば俺の心と通じた時には……だった）やはり綺麗な日本語を話していたから蓋し邵廻瑩も……なのだが、しかしそれならば未だ通していない時のミキのあの訛りはいったい何だったのだろう？いささかでも気になるが今はそんなことを慮っている時ではない。語気を強めた邵廻瑩の口調に気づいた連れの相田なる男がこちらに戻って来ると、異変に気づいた運転手も表へと出て来た。俺はイチかバチか俺の名刺を取り出して邵廻瑩に渡そうとする。「これを。しまつて！」小声で鋭く云うのに一瞬躊躇したあと『いいわ。受け取つてやるわよ。その代わりあとで……（詰問なりするからね）』とでも云いたげに邵廻瑩が名刺をバックにしまつてくれる。安堵してあ

とはどうとでもなれと覚悟する俺に「おい、何をやっている？お前、誰だ？」「警察に通報しましょうか？」相田と運転手がそれぞれ云う。俺は「いや、こちらの人が知り合いと間違えて……どうも失礼しました。人違いでした」と云いわけするが「なに？人違いだ？……と凄みながら相田は邵廻瑩に『こいつ、行かせていいの？何もされなかつたか？』と目で聞くようだ。邵廻瑩は軽くうなずいてから「いいですよ、キャップ。本当に人違いをしたようだから」と云つて俺の放免を許諾してくれる。「ちっ、気をつけろよ、お前。警察に通報してやつてもいいんだぞ」本当はナンパしてたんじゃないのか？となおも疑い、相田は凄むが後悔と委縮をよそおつた俺の無言を確認すると「よし、もういいよ。行けよ」と放免してくれた。面目なかつたがこれもミキとの約束を果たすためと自分を慰め俺は地下鉄内幸町の駅へとトボトボと歩いて行つた。面目なかつたがこれもミキとの約束を果たす為と自分を慰め俺は地下鉄内幸町の駅へとトボトボと歩いて行つた。心中では『キャップか……なるほどな、彼女は確かに新聞記者のようだ。』

【再び邵廻瑩のあで姿を。確かにアンバーのママの云つた「上玉中の上玉」は本当だ。これに美人局などをやられたら恐らく誰も抗えないだろう。】



しかしだったら高級ホステスのようなあの格好はいい
 たい何なのだろう？』などと、また『それにしてもい
 い女ぶりだったなあ。あれを抱いたんだなあ：なんて
 改めて思うよ』とも思いをめぐらす。内幸町の信号ま
 で来てから俺は通りを渡ってしまふ。駅とは反対だっ
 たがいつものように生理的欲求（すなわち喫煙）を覚
 えたからだ。信号を渡るとそこは日比谷公園でその角
 には交番がある。『警察を呼ぶってか。ちえっ、目の前
 が交番だったんだな。くわばらくわばら』立哨する警
 官の目と視線を合わせないようにして俺は日比谷公園
 の奥へと入って行った。人のまばらな一角を見つけて

ベンチに腰をおろしわかばに火を点ける。考えてみれば
 午前中に家を出てから1本もタバコを吸っていない
 深々と煙を吸って吐いた。今日は金曜日でいい天気だ
 ある。この日とで広々とした公園内にいれば何を毎日
 あせくせと：などと思ってしまう。まったく昨日一日
 の体験と昨晩の夢で俺の人生への捉え方が180度ひ
 つくり返ってしまったような気がする。あの天上界の
 イブや地獄の洞窟内で会った人々、獣人、そして何よ
 り自分が死んだことさえ自覚できずに、暗い霊界で
 悶々とし、そこからの束の間の解放を餌に死後もなお
 利用され翻新され続けるミキこと、××××××××××
 さんの霊：良きにつけ悪しきにつけ（光の世界につけ闇
 の世界につけ）彼らに嘘はなかった。地が出ていた。
 それに比べて何と云うかおのれの立場や見栄、世間体
 を常に慮って、恰も鶴見のイブのごとくにオブラート
 に包まれて、盲のように生きているわれわれ：ではな
 いだろうか？E・スエーデンボグの言葉で「この世
 の人たちは死んだように生きている」というものがあ
 り「時には夢の途中であなは迷子になり、より良い
 ものを見つめます」なる言葉をツイッターで見た覚え
 がある。どちらもその通りだ。渋谷の地縛霊たちの悲
 しみや苦しみは絶対だった。なぜそうなのか？死後あ
 らなるのだったら人は誰も死にたくないだろう。おそ

らく真実は逆なのだ。生前霊としての、いや、魂」としての自覚をまったく慮らず（換言すれば「自分は何のためにこの世に生まれて来たのか？」を問わず）肉体や物質への快感原則のみに生きてしまった結果があなのだろう。俺はああはなりたくなかった。気障な云い方を許してもらおうなら俺は夢世界で実感し得たイブの光の指向を俺なりに模索し、体現し、またミキの闇（同時にこれは俺の闇！そして万人の闇でもある）

その分けは後述する：）をぜひとも晴らしてみたいのだ。いや、晴らさねばならない。「人間というものは良くも悪くも内外の次元を結びつけて、新たな世界を、変貌」させてゆく存在」という教えをかつて某宗教団体で聞いたことがある。もしそれであるならば、俺が世界を変貌させるその指向は、その具体策は、先の2つでしかないのだ…。

さて生理的欲求も果たし終わったし、やおらベンチから立ち上がると俺は来た道に戻って行き、今度は虎ノ門へと向かう。山口との約束時間までにはまだ間があった。邵廻瑩との邂逅はあっけなく終わってしまったので空いた時間に今一人の重要なターゲット、すなわち△AD博士を訪おうと思ったのである。邵廻瑩に告げて効果観面だったあのサマンサ・クリニック、バー・アンバーでミキが必死の思いで書いてよこしたこ

のクリニックこそ、△AD博士が開業する医院ではないかと、俺はそう推理したのだった。邵廻瑩が何らかの理由でここにかかりそこで△AD博士と関係を持ったのではないかと。ミキが邵廻瑩の身体に乗り移り、邵廻瑩がはからずも身を霊媒としてささげてしまった所こそ此処なのかも知れない。場所も日本プレスセンタービルから遠からず、精神科にかかることを慮った邵廻瑩が同僚社員らに白眼視されることを恐れて、近在にあったこのクリニックに掛かったのだろう（プレスセンタービル内に精神科クリニックがあることを俺はネットで調べていた。彼女はわざわざここを避けた分けた）。イチかバチかクリニック名を告げた時の彼女の動揺ぶりから見ると俺の推理は当たらずとも遠からずではないか。とにかく行けばわかる。もしそこにあいつが、△AD博士がいたならば果たして俺を見てどんな顔をするだろうか。「おや？バーの会計係から医者に転向したんですか？」とでも云ってやろうか。ふふふ。

徒歩で15分ほどでサマンサ・クリニックに着いた。虎ノ門駅に近いテナントビルの1階にあるクリニックだ。中に入ると10坪ほどの待合室があって奥のカウンターへと行く。20代半ばくらいの快活そうな女性がテキパキと感じよく受付をしてくれる。渡された初診受付用紙には「不眠症」と書いておく。これはまん

ざら嘘ではなく（それどころかシビアだった）昨日バ
ー・アンバーでミキに云いかけたことだったが、ヤク
ザのチンピラと思しき輩がこしばらく俺に付きま
って離れないのだ。具体的に云えば団地5階の俺の部
屋の真下に引越して来て、俺が寝ると下から棒で天
井を叩く、あるいは部屋中に小型インバーターと思し
き機械を持ち込んで音を立てる等の悪さをずつとし
ていた。文句を云いに降りて行っても居留守を使う。

ドア表札には何も名前が書かれておらず、管理会社に
文句を入れれば「そこは空室だ」などと、いけしやあ
しやあと平気で嘘をつく。おっつけ俺のユーチューブ
番組絡みの暴力団からの脅し…かも知れない。生活に
甚だしく支障を来して放つてはおけないのでいず
れ対処をせねばならない。ところでそれがゆえの「不
眠症」ならば精神科に來ても仕方ないのだが、もし万
が一チンピラどもへのやらせ元がAD博士であった
なら、いま此処ほどそれへの対処場所として当を得た
ところはないのだ。親分に直談判をしに來たこととな
る。さてどうなるか。今しも「田村さん」と診察室の
ドアが開いて看護婦が俺の名を呼んだ。

(…続く)



【ようこそ。もう一度あの注射を、容量を増して…で
はあるまいな？ [Pinterest](#)より拝借】